

東北タイ・ドンデーン村：村のたたずまい

海田能宏（京都大学東南アジア研究センター）

口羽益生（竜谷大学文学部）

本特集に収録される論文はそれぞれに、ドンデーン村の全体像からみると比較的限られた部分をかなり専門的に分析し、論述したものである。本稿では、これらの論文を補完することを目的として、この村の概要を、地理、自然環境、村史、農耕、土地所有、日常の衣食住などから、家族・親族関係、社会組織、行政組織、宗教、諸行事、教育、村と外世界との情報交換にわたって、素描しようとするものである。データを提示するのは必要最少限にし、また本特集の中で詳述される部分は割愛して、記述することにする。*

交通的立地

コンケン市は東北タイ中西部の中心都市として、最近急速に発展しつつある。ドンデーン村はこのコンケン市の都市圏内にある、ありふれた、標準的な大きさの村である。コンケン市からは、国道2号線（フレンドシップハイウェイ）を南下し、チー河をこえてタープラの町を出はざれたところで、東方のマハーサラカム方面へむかう国道208号線に入り、6kmばかりで小さな低い丘を上りきったところのサワーン村で左手、北向きに、よく整備された土道をとる。そこから2kmばかり北上すれば、大きなドンハン村を経て、ケー沼のほとりに展開する、木立に覆われたドンデーン村に達する。コンケン市からの行程は20km、車で30-40分である。

地理的環境

「ドン」とは、小さい独立の丘の意であり、「デーン」は赤紫色の茎をもつケナフの一種である。村の名はこの植物の名からとったとも、あるいは最初の開拓集団の元村の名をとったとも言われている。

この小さい、低い丘は村の北はずれでチー河の氾濫原に続く。チー河まではわずかに3kmほどである。村の南は低い丘陵地へと続き、その丘陵は南方へ向かって高度を次第に高めていく。ドンデーン村は丘陵と氾濫原のちょうど境目に位置している。

* データは、筆者らの記憶にもとづくものの他、多くは1983年と1985年に出版した英文中間報告書、本調査に参加したメンバーの間の情報交換をはかる目的で不定期に出されたドンデーン・ニューズレター（1-21号）、およびメンバーが折おりに種々のメディアに発表した論文・報文等によるものである。それらの詳しい情報については、本特集号の編者のことばを参照されたい。本文の性格と、またドンデーン村で得たデータのすべてはメンバーの共通の財産にしようという合意にもとづいて、本文中ではこれらのデータなどの出典をいちいち明記しないことをお断わりしておく。

チー河は東北タイを形づくるコラート高原南半部の2大河川のひとつで、この河沿いの河谷平野には、チャイヤプムからウボンラーチャタニまで 400 km にわたる大水田地帯がひらけている。コンケン地方はコラート高原を中央平野から画する西縁山地に近く、気候的には寡雨地帯の、いわゆるレインシャドウゾーン（モンスーンの山陰）に入るため、雨量は東北タイのなかでも少ないほうで、その降りがたも不安定である。チー河はたびたび氾濫を繰り返してきたが、チー河沿いでも、ドンデーン的位置するあたりは、河が狭い谷間から、コンケン市とタープラの間で低い丘陵地を突き破って一挙に平野に突出するところであり、洪水の勢いはとりわけ激しい。このため、しばしばかんばつと洪水に悩まされる東北タイのなかでも、ドンデーン村の水田地帯はかなり条件の悪い位置にある。

ドンデーン村の主な農地になっている氾濫原はノングと呼ばれる凹状の地形単位からなっており、そのようなノングが 20 近くも連なっている。最低位部にはかならずノング

（自然の沼）をもち、境界は古い地形面の侵食し残されたリッジ状の地形か、あるいは比較的新しいサン川（チー河の旧河道とおもわれる）の自然堤防である。低みの、水持ちのいい水田になっている部分は、洪水の勢いを反映して、「氾濫原」でありながらも、沖積的というよりも侵食的な地形である。したがって、サン川の自然堤防を除くと、かなり古い、風化の進んだ土壌が多く、肥沃度は一般に低い。このような、ノングの連続体としての氾濫原をもつ特徴的な地形は少なくともコンケンおよびマハーサラカム県のチー河筋でのひとつの典型的な水田地帯の地形である。

季節

一般的に季節は三つに分けられる。雨季の雨が本格的に始まるのは 5-6月であり、それとともに稲作作業が進展してゆく。ふつう 9月に雨量がもっとも多く、10月のなかばで雨季があける。雨量は1,000-1,400 mm程度であるが、先にも述べたように、雨の降りがたが非常に不安定であって、年々の変動が著しく大きい。たとえば、第1回目の調査年1981年には雨季前半は順調に雨が降ったが、8-9月の雨は2か月で200 mmにも達せず、稲は生育後半でかなりのかんばつ被害を受けた。2回目調査の1983年は雨季のはじまりは少々遅れたが、本格的な雨季に入ってから、適量の雨がちょうどいい間隔であり、稲の生育は順調で、近來にない例外的な大豊作となった。

11月以降北寄りの風向に変わると、さわやかな稔りの季節を迎える。12-1-2月となお気温は下がり、最低気温は摂氏10度程度になる。開放的な高床の、しかもトタン葺きの家屋の構造とあいまって、この季節の夜はたいへんに寒い。あけがた寒さに目を覚ました老人達が、まだ薄暗いなかで毛布にくるまって、たきびを囲むのはこの季節の風物である。この時期は野菜作の準備などに忙しい。

この寒い季節の直後に、ほんとうに暑い暑季がやってくる。トタン屋根の下は摂氏43度ぐらいにもなり、もっぱら階下の土間で暮らすことにもなる。家々からは夜中じゅうアップナーム（水浴び、もく浴）の音がたえない。雨の待ちどおしい、寝苦しい季節である。これが 3-4-5月とつづく。

土地開拓史

村人はラーオ語を話す人々である。ドンデーン村は120 年ばかり前に、東のローイエツ

トやマハーサラカム方面から土地を求めて移住（ハーナーディー）してきた人々を父祖として始まった典型的な開拓村である。森に覆われていた氾濫原や、村の南方の低い丘陵をきざむ浅い谷間に水田を拓き（チャップチョーング）、集落の近辺や水田地帯の真ん中を流れる小川、サン川の岸に桑を植え、小川やノングで魚を獲り、自給自足的な村落経済を發展させて来た。水田にはいまでも相当多くの大小の立木が残されており、開拓空間らしいたたずまいを今に留めている。以前はいかに森と林が圧倒的に優勢な景観であったかは、多くのノングが例えばノングケュー、ノングドゥーン、ノングベンとか、そこに繁茂していた木や草の名前をとった名称で呼ばれていることに象徴されている。開田の当初はノングの低位部のみが拓かれていったが、1940年代の終わり頃には最高位部に近いところまで開田が進み、現在の水田分布とほとんどかわらぬほどになっていた。これは、人口増加に加えて、人頭税から土地税へと変わった税制がこの村にも適用されるようになってき、それに伴って所有地を登記する必要が生じたときに、「土地所有権確認としての開田ブーム」が起こったことも関係している。

水田になりえない丘陵地には、太平洋戦争が始まる頃（1941年前後）からワタ作が導入され、やがて戦後はケナフの栽培がさかんになり、ケナフはやがて1960年代終わりごろからキャサバに置き換えられていった。先の小川の岸辺にはクワにかわって、いろいろな種類の野菜、果実が集約的に作られるようになって、それらはコンケンやタープラの市場で売られる。このなかではトウガラシが圧倒的に重要である。水田農耕に必須の水牛に加えて、肉牛と馬の飼育がさかんになり、農業経営も、稲作一辺倒から、このように畑作、野菜作、家畜飼養等と多角化されてきた。ドンデーン村は、感じとしてはいまでも水田村ではあるが、経済的には、とくに現金収入の面からは、稲作はすでに野菜作や家畜飼養より下位になっている。

野菜作が急発展した背景には、コンケン市の発展、国道と村むらを結ぶ枝道路網の整備、それにラジオ、テレビによる情報量の増加、農外就業機会の増加など、村人にとって外界が一挙に近くなったなど、いわゆるインフラストラクチャーと情報の整備をあげることができる。これは近年のことであり、枝道路網の整備は1970年代に入ってから、とくにその後半、電気が入ってきたのは1976年である。

生業

1983年現在で、村の人口は 907人、世帯数は 183世帯である。世帯主の生業・職業構成は、農業従事者が、引退した農業者を含めて、134人と全体の 73 % を占めるのは当然のこととして、俸給生活者 33 人(18%)、商人 5人(3%)、職人 4人(2%)と非農業部門への就業もかなり目立つようになってきている。18 年前、水野氏が調査した頃は、ドンデーンの村人のなかで、俸給生活者は小学校の小使ただ一人であったことからみると、隔世の感がある。俸給生活者は、タープラの東北タイ地域農業センターの雇い(13 人)をはじめとして、タープラのコカコーラ会社の工員・事務員(7 人)やコンケン市へ通う建設作業員、運転手などが主で、商人は村内の精米所経営者等、職人は大工、自転車修理屋等である。世帯主以外にも、若い世代の男性の非農業部門への就業志向と、主婦たちの野菜販売などを含めると、上に述べた傾向は一層著しいものとなる。

ドンデーン村の経済が、現物獲得経済と現金獲得経済の二部門構造をなしているとすれ

ば、前者は稲作と若干の食物採集であり、残りすべては畑作、野菜作を含めて、後者である。GDPに占める農業セクターの比率はすでに40%以下になり、稲作のそれは10%そこそこ計算されている。

稲作

稲作は現物獲得部門のほとんど唯一の、もっとも重要な生業である。村人たちの一年の生活のリズムは稲作と共にあると言っても過言ではない。

ことごとく天水田である。したがって、水環境に品種、作期、栽培方法を適応させることが最も重要な農耕の技術である。一般に晩生種（カオヤイ）は水つきのいい低位の、中生種（カオクラング）は中位の、そして早生種（カオドー）は水条件の不利な高位の水田に植えられる。6月ごろに苗代を準備し、7月以降、雨が十分に降るのを待って、耕起、代掻き、田植えがほとんど同時に行なわれる。耕起と代掻きは水牛により、田植えはもちろん人力による。東北タイは一般に砂質の土壌であり、代掻きをしても粒子がすぐに沈降し、苗を挿すのが困難になりやすいので、上の三つの作業がほとんど同時に進められるのである。雨の降り方がきわめてきまぐれであることに加えて、このような作業上の制限もあるので、田植え作業時の労働のピークと遊休性が共にたいへん高くなる。

三つの品種群とも感光性品種である。早生、中生、晩生品種はそれぞれ10月はじめ、10月中旬、11月初旬に順に出穂して稔りの季節をむかえる。

丘陵地をきざんだ浅い谷の一部には塩害地がある。降雨が多い年は塩害が顕在化しないが、かんばつに遭うと大きな被害がでる。かつては、こういう場所で乾季に表土から塩を採取し、自給していたものである。

ドンデーンの稲作の最大の特徴は、その不安定性にある。過去6年間の稲作は、とりわけ変動が激しかったようにも見受けられるのであるが、1983年の大豊作の生産高を10とすると、1978年は未曾有の大洪水のためにほとんど0、つづく1979年は大かんばつで1、1980年は再び大洪水でほとんど0、調査年の1981年は生育後期にかんばつに見舞われて5、1982年は田植え期のかんばつに9月の浸水が加わって2であった。1983年1年の生産量はこの年を含む過去6年間の総生産量の実に50%以上を占めたのである。こんなことで、ドンデーンの稲作はもっぱら自給米生産を目的とし、集約化技術を一切導入しないで、細ぼそと行なわれている。1年豊作があれば3年間は食いつないでゆけるといわれているが、村全体として、近年は自給するにもほど遠いようである。

農地所有

1世帯あたりの平均的な農地所有は水田15ライ、畑5ライ、菜園1ライ程度である。典型的な所有の形態は、ノングの低みに2-3枚の大区画水田と、ノングの斜面をあがるにしたがって小さくなる小区画の水田30枚ほどを持つ。斜面のさらに上は陸稲やキャサバの畑か、小川につづくところでは、川の内側斜面に1ライ区画程度の菜園がある。多くの世帯は集落の東南方にひろがる丘陵地域に小さなキャサバの畑地をもっている。もちろん土地所有の大小はあり、統計的には0ライから60ライに及ぶが、土地所有や相続は家族周期と関連させて慎重に分析されなくてはその階層分化に関する実相は掴めない。実感から言うと、農地所有の多寡に基づく階層分化はあまり進んでいないようである。

村の北に広がる氾濫原の水田地帯では、ドンデーン村とドンノイ、ドンハン両村の農地が一見錯綜しているようにみえる。しかし、ドンノイとドンハン村の一部はドンデーン村から派生したという歴史的事実を考慮し、また近隣諸村の農地所有状況を調べた結果からいうと、村々が塊村をなしてははっきりしたまとまりを持っているように、村々の所有農地も、境界が明示されているわけではないが、ひとつのまとまりを持つことがわかった。

ドンデーン村民の所有する農地は東西 3 km 南北 4 km の範囲に展開しており、通耕時間も 5 分から 50 分の範囲である。水牛、牛車の通る、トゲのある灌木の生垣で囲われた、粗末な牛車道（多くの場合、ノングの境界でもある）以外に農道は整備されておらず、人々はその牛車道とある決まったアゼ道を通して、水牛を追い、あるいは天秤棒を担ぎ、徒歩で野良に通う。農繁期の明け方と夕暮にはそれらの道に人と水牛の列がとだえることなく続く。ごく最近では、この牛車道を、収穫されたモミを満載した小型ピックアップトラックが砂塵をまきあげて、村と野良の間を通うようになってきた。今後の大きな課題は農道の整備になるであろう。

集落景観

183 戸の世帯からなるドンデーンの集落はキュー沼のほとりにかたまっている。ドンはいくつかの小丘といえ、その最高位部とキュー沼との比高は 2 m ほどしかない。ふつう 1 戸あたりの屋敷地は 400 m² 程度で広くはない。東西、南北それぞれ 3 本の幅 5 m の集落道ではっきりと区画されて八つのクルム（隣組に相当する）に分けられている。それらクルムのなかには、世帯ごとの所有区画はちゃんと測量され、境界石も設けられてはいるが、見た目には境界などもはっきりとせず、曲がりくねった小径が勝手によその庭をつき入るなど、かつての自然な「家々のあつまり」（ムーバーン）のおもかげを残している。小さな精米所が 4 カ所、小さななんでも屋が 6 軒ある。全体として、集落は大小の樹木で覆われており、涼しげな木陰の中にある。東北端と西南端にはワット（寺）と学校がそれぞれ村域の 20 % 弱ほどの、大きな敷地を占め、いずれも村人の寄りあう場所を提供している。西にひろがるキュー沼は、ドンデーン村に広かつた景観と、みずみずしさと、そして豊富な井戸水を与えてくれる。そして、キュー沼では、夕方になると、人々と水牛が並んで水浴する。

村の北隣りはすぐにドンノイの集落につながる。ドンノイはドンデーンの姉妹集落で、南隣りのドンハン村とともに、ドンデーン村から派生した集落である。このふたつの村もキュー沼のほとりの小丘の上にかたまっている。

住居

住居はほぼ例外なく高床、トタンぶきで、きわめて開放的である。以前は屋根はチガヤ（ヤーカー、屋根の草の意）でふいたものである。世帯あたりの住居床面積は約 100 m² で、ひとりあたり 20 m² 弱というところである。典型的な住居は 2 m ほどの高さの階上に約半分から 3/5 程度を占める、厚い板張りの、開放的なベランダ式の居間とその一隅にある台所、および二つあるいは三つの小さな寝室からなる。壁は大半が板張りであるが、3 割ほどはアンペラ（割り竹を編んだ丈夫なマット）張りである。階下は牛や水牛舎、養蚕の場、ござ編みなどの仕事をする重要な空間である。ここは土間で、もちろん壁はない。外から階段あるいは梯で上のベランダへ直接上がるようになっている。住居も敷地も決して大き

くはないが、屋敷地には緑濃い木立が茂り、それらの多くは有用樹でもあり、わりに居心地のいい、ゆったりした空間であるとの印象を受ける。主屋のわきにはかなり大きな米倉を建てている。農作業のほとんどは野良で行なわれるので、屋敷地のなかに脱穀とかモミ乾燥のための大きな裸地空間は不用である。

最近では建築ブームである。いま建てられているハイカラな家はほとんど階下をもレンガ壁で囲いこんで、セメントモルタルの土間とし、応接間、居間などの機能を持たせるようになってきた。外壁にはペンキを塗るなどカラフルな家が多くなってきた。そんなハイカラな家はいま全体の10%ぐらいである。

便所は主屋から離れた小屋づくりである。全部の世帯にあるわけではない。最近では奨励されており、いま約7割ぐらいの世帯が便所を持つようになっている。手押しポンプをもった自家用の井戸は、1981年にはわずかに19カ所であったものが1983年には46カ所と急に普及しつつあるようである。ただしこれらの井戸は雑用水用であって、飲用ではない。ここの井戸水は一般に塩分を含んでおり飲用には不適である。飲用水は雨季には雨水、乾季には隣村ドンハンやサワン村などにある数少ない飲用水井戸から汲んでなくてはならない。各戸とも飲用水を貯める大瓶をいくつも用意している。1981年にはそれらの大瓶の平均容量が約600リットルであったが、1983年には約1,150リットルに急増していた。

食生活

食生活は基本的に自給自足的である。主食はもちろん蒸したモチ米である。朝いちばんに大量に蒸しておき、それを1日3食たべる。もっとも一般的な副食はソムタムという、未熟パパイヤの細いせんざりを田ガニと、かなり大量のニンニクとトウガラシと共にプラーラーという独特の調味料であえた、いわばサラダであり、これは毎食つきものである。プラーラーは塩蔵淡水小魚を発酵させたものであり、このうえなく臭いが、すべての調味の基本である。これに淡水魚のスープがつけばわりに上等な日常食である。

肉を食べるのはハレの日のみである。肉の食べかたはラープという、いわば「生ミンチ」がもっとも好まれる。牛肉、水牛の肉を内臓も含めて、細かく刻み、種々の香味野菜などを入れてまぜあわせるだけの簡単な料理である。祭にはなにがなくともラープは必須である。カイヤーン、つまり焼き鳥、あるいは鶏肉のあぶりやきは東北タイの代表的料理であるが、村ではめったに食べられるものでない。好まれる魚はナマズ、フナ、ソウギョ、ライギョの類で、蒸したり、焼いたり、煮たり、スープにしたりする。ほとんどノングで漁してきたものであり、購入することはまれである。一般に、東北タイの料理はほとんど生で食膳に供するか、あるいは焼く、あぶる、乾す、蒸す、ゆでる、煮るのが主で、「いためる」ことはしない。従って、脂肪をあまり摂らないことになる。

日常のおかずは季節によって豊富な時と、貧しい時がある。菜園や樹園地の産物は一部商品として市場に出されもするが、自家用も多い。それらは、菜園からササゲ、ヘチマ、トウガン、ダイジョ、パパイヤ、シャロット、ニンニク、カラシナ、コエンドロ、カリフラワーなど、樹園地からはバナナ、シャカトウ、マンゴー、パラミツ、パンジロウなど、さらに家の周りからココヤシ、メボウキ、ガランガル、レモングラスなども加わる。

現在、土地は極限に近くまで利用されているとはいえ、自然はまだまだ豊かである。おかずの材料のなかには自然の恵を採集的に集めたものも多い。例えば、植物性食品では、

林からはヤマノイモ、タケノコ、池や小川からはハスの花梗と水生イモズルなどがあり、それに種々の商品にはならない果実、食べられる木の葉や草の種類は数え切れない。動物性食品では、前述の大小の魚やカエルや野鼠は貴重な蛋白源で、また田のタニシ、田貝、田ガニ、サワガニ、田エビ、オタマジャクシ、タガメ、ゲンゴロウ、コオロギ、イナゴ、バッタ、コガネムシ、糞虫、ケラ、カイコのさなぎ、ツムギアリのたまご等々おいしく食べることができる。なかでも、コオロギとカイコのさなぎは美味である。田植えが一段落した時期に田圃に人影をみれば、それは上のような「自然食品」を採集する人々である。少年少女の活躍する場面でもある。

肉類を生食する風習は、健康問題に重要な影響をおよぼす。肝臓をはじめとする内臓の寄生虫病に侵されている人々が多い。

家族・親族

村の中には、世帯を意味するタイ・ラーオ語のコープヒエンと、親族を意味するスムという言葉がある。コープヒエンは、標準タイ語の世帯や家族を意味するクロープクルアにあたるが、厳密には同一家屋に同居する近親からなる世帯を意味する。スムには広狭の二義があって、狭義には、親子、夫婦、きょうだいを中心とする家族を意味し、広義には個人を中心に祖父母、親、子、孫の四、五世代の親族やふたいとこあたりまでの父方母方双方の親族を指している。それはさらに擬制的に拡大しても用いられる。このような親族は、日常相互に互助が期待される間柄であり、「共働、共食」（ヘットナムカン、キンナムカン）は近親互助規範を象徴的に表現する言葉としてよく使われる。

結婚すると、男性はしばらくは妻方の世帯で妻方の家族と同居するという、妻方居住の伝統的な慣行がある。結婚相手は、ほとんどが本人が自分で選ぶ。初婚年齢は男性が22-23歳、女性20-21歳である。結婚後、妻方に居住して、2-3年または数年の後、夫婦は別に独立の家屋を建て、自分の世帯を持つようになる。その後も、経済的に独立するまでは、娘夫婦は親の世帯と田畑を共同耕作し、収穫物を共同消費しながら、自らの財力を蓄えてゆく。この期間、親世帯と娘世帯は別居しながらもまるでひとつの世帯であるかのように共同生活を営む。水野はこの世帯間で共同するグループをとらえて「屋敷地共住集団」と呼んだが、このような共同関係では、屋敷地に共住することよりも、農業、とくに水田耕作を中心とする生計の共同のほうが基本的には重要である。

最近では、他地域の女性が婿入する例が増える傾向が見られるが、未だ妻方居住の慣行は支配的である。子供のなかに娘がいなきには、息子が家に留り、女性が婿入する。このような慣行は後述する相続慣行と関連している。

老親を扶養するのは、事情がゆるせば、息子より娘が好まれ、理想的には末娘が最後に家に留って、親の世話をするのが望ましいとされている。たとえ老親の世話をする娘家族が別居していても、両者はまるでひとつの世帯であるかのように共同生活を営むのがふつうである。世帯は基本的には核家族。つまり夫婦と未婚の子女から構成される（62.5%）が、妻方居住制であるために、既婚の娘夫婦が同居する場合（26.1%）も少なくない。世帯の構成員数は1-11人であり、平均は5.1人である。

親・子世帯の共同はかなり密度の高いもので、3-4世帯にまたがって行なわれることもある。しかしこのような世帯間の共同は親子の間にのみ限られたものではなく、きょうだ

いの世帯間、おじ・おばと甥・姪の世帯間でもみられる。水田耕作を中心とするこのような世帯間の共同はドンデーン近親間共同のひとつの特徴であり、全世帯の 35-36% がこのような共同にかかわっている。

妻方居住制のために妻方・母方の親族がとくに強くなり、男性の地位は相対的に弱くなるように思われるが、公共的場面では男性の権威は強く、世帯の代表者も基本的には男性である。宗教的な行事においても、妻方の親族のみが中心となる考え方はなく、父方母方双方が重視される。しかし、近くに住む妻方の親族が数の上では多いために、妻方の親族のつながりのほうがより強くなる。

木目糸売

村には、「男は初米、女は白米」という諺がある。つまり、男性はどこに行っても芽を出す、女性はそうはゆかないというのである。一般的に息子は他出し、独立すること、娘は親元の近くに留ることが期待される。このため、伝統的には、息子には水牛や金銭のような動産を、娘には農地のような不動産を与える相続慣行がある。この慣行は、原則的には妻方居住制と裏腹の関係にある。息子が妻方の財に依存できる場合には、不動産は娘のみに分割相続され、親の老後の世話をする娘が親の屋敷地、家屋、その他の財をも相続して、他の娘の 2 倍の財を相続するものと考えられている。

ドンデーン村生まれの息子と娘を持つ家族の相続事例 72 のうちで、娘が息子よりも多くの農地を相続した事例は 35%、娘のみが農地を相続した事例は 43% で、両者の合計は 78% となり、「農地は主として娘に相続される」といえる。しかし、性を問わず男女均等に財を与えるという考え方が基本にあり、困っている子には娘・息子を問わず、多くを与える場合がある。息子は婚出して、妻方の財の分与にあずかるので、結果的に相続は娘中心になる傾向がある。息子も困窮する場合には農地の相続を受ける。水田の相続についてみると、親の所有面積が多いほど娘・息子間の分割相続の傾向がみられ、逆に親の所有面積が少ないほど相続は娘のみか、末娘 1 人になされる傾向がある。

行政組織

ドンデーン村はムーバーンであり、ドンハン行政区、ムアング郡、コンケン県に属する。村長は成人男女の村人による選挙によって選ばれる。区長は村長を被選挙者として全区民成人男女による選挙によって選出される。村長の任期は辞任を申し出ないかぎり 60 歳までであるが、区長の任期は 5 年である。ドンハン区には 10 の村がある。ドンデーン村は未だ区長を出したことはない。郡長と県知事は官選である。

行政区には、区長を議長とする区議会がある。区議会は、区長（自分の村の村長兼務）と 9 名の村長、10 名の村代表、区の医務委員（通称タンボン・ドクターと呼ばれているが、必ずしも医療の専門家ではない）1 名と、書記（通常、区内の小学校長の 1 名がこれにあたる）1 名から構成される。医務委員と書記は区長によって任命される。

この区議会は、区のレベルの自治活動を推進するために、1956 年に始められたものであるが、1975 年以来、政府が区に対して、区レベルの開発計画が自主的に計画され実施されるようかなりの財政援助を与えるようになるまでは、区の自治活動は、主として財政難から、まったく停滞していた。政府による財政援助は、今日では、「農村地域雇用促進計画」

と呼ばれる計画のもとに継続され、これによって区議会は実質的な開発計画を作成し、実施することが可能となっている。1983年よりは、政府によって区に配置されている村落開発指導員のほかに、農業普及指導員、区の診療所の指導員の各1名が、助言者として区議会に参加している。ドンデーン村からは、村長、村代表と区の医務委員の3名が区議会に参加している。

村長は2人の副村長を任命し、数人の相談役をしたがえており、かなりの権力を行使できる。とはいえ、かれは村の世話役である。村長として一般の村人から尊敬もされている。村長はなにか問題が生じたり、郡からの指令が伝えられると、問題によって開発委員会、教育委員会、寺管理委員会などに諮問し、場合によっては世帯主全員を召集し、村の中央にある集会所で村総会を開く。1981年の調査時に、下流の隣村とのサン川の水位調整問題をめぐって争いが起こっていたので、当時の村長はしょっちゅう招集板木を叩いては村民を集めていたものである。

1983年われわれが滞在中に、村長の交代劇が生じた。旧村長は行政手腕は有能であったが、村内に作った貯水タンクをめぐる小さい汚職をとがめられ、いわば村民にリコールされたかたちで退任をよぎなくされた。新しい村長は3人の立候補者の中から激戦の末に選ばれたが、彼は若く、行政手腕にもすぐれているとの評判である。村長の望ましい資質としては、篤信、公平無私などの美德に加え、最近では区議会などにおける指導力と手腕をも大いに期待される。従来から、しかし、村長はほとんど例外なく村の有力な親族集団（スム）の中から出ていることも事実である。

村の諸組織

村にみられる主要な社会組織は次のようなものである。1982年に、国の村落開発計画にもとづいて村落開発委員会が組織された。その委員会は村長によって推薦され、村民総会によって同意された村の有力者から構成され、村長の相談にのり、村長に助言する委員会である。その構成員は50-60歳代のものが多く、そのうちの5-6名は側近として、村長のふだんの相談役となっている。

ドンデーン村とドンノイ村の共通の小学校のための、村の有力者から構成されている教育委員会があるが、さほど活発な活動はしていない。

村の主要な伝統的組織はすべて寺院活動に関連したものである。公式の組織には、まず寺委員会があり、これはドンデーン村とドンノイ村から2名ずつの代表、計4名によって構成されている。しかし、村長や長老たちはこぞって寺院活動をもりたてるのに熱心であり、この寺委員会自体は陰の薄い存在である。このほか、寺の財務に関する寺財務委員会とクルムと呼ばれる隣組組織がある。前者は、ドンデーン村から4名、ドンノイ村から2名、計6名の委員からなり、寺院建築や諸儀礼のための寄付金を管理する。前述のように、ドンデーン村は八つのクルムにわけられており、クルムは寺の大きな行事の共同活動を推進するための単位になっている。村の青年団は、1960年に寺に短期間滞在していた僧侶によって組織されたのに始まる。その僧侶が村を去って以来、青年団の活動はやや不活発にはなったが、それでも未だに寺の大祭などに必要な労力を組織し、提供するに十分な組織力を保っている。

そのほか、コンケンの農業銀行から農業資金を借用するために組織された数人のグルー

プヤ、かんがいのための中型ポンプを県庁から借り出すための臨時のかんがいグループもいくつか組織されているが、これらは個人的な関係によるか、あるいは農地（水田）を近くに持つもの同士のグループである。

宗教・祭事

村人はすべて小乗仏教徒である。開村後間もなく創建された寺（ワットバーン）があり、僧房、仏堂、講堂、鐘楼、建設中の布薩堂および火葬場、墓群、僧侶のもく浴用の池からなっている。現在僧 2 名、見習僧 10 名がいる。寺はドンデーンとドンノイ 2 ヲ村で維持されている。村の朝は寺の僧侶と見習い僧の一回の托鉢から始まる。月 4 日の仏日には村の中年以上、とくに中高年に達した婦人、の善男善女が寺に集まり僧侶の話を聞く。寺を中心とする仏教その他の行事は大変に多い。おもなものだけでも、①新年儀礼（ブン・ピーマイ） 1 月 1 日、②カウチー奉獻祭 1 月 28 日、③仮出家者の為の得度式（剃髪せず白衣をまとして八戒を遵守する） チー・プラーム 1 月 30 日 - 2 月 5 日、④ジャータカ誕生祭（ブン・プラウェート） 2 月 6-7 日、⑤パーパー奉獻祭（ブン・トートパーパー）、主に入安居から出安居までの期間を除く乾季に行なわれる、⑥灌水祭（ブン・ソクラーン）、陰暦の正月にあたる 4 月 13-16 日、⑦ブン・クーとウィエンティエン儀式、ブン・クーは仏誕節の日にノンクワオ村のストゥーパ遺跡のある森の寺で開催、⑧入安居（ブン・カオパンサー） 7 月 24 日、⑨稲穀祭（ブン・カオプラダプディン） 9 月 6 日、⑩カオサーク奉獻祭 9 月 21 日、⑪出安居（ブン・オークパンサー） 10 月 21 日、⑫カチン儀礼、その他のロケット儀礼（ブン・バンファイ）などと 12-3 を数える。そのたびに、親戚、縁者、知人友人たちが村を訪れ、寺には多くの人々が集まる。

夜はいろいろな催し物にうち興じることになる。かつてはモーラム（男女 2 人かあるいは数人が竹笛の伴奏でかけあって歌い踊る東北タイの伝統的芸能）が好まれたが、いま圧倒的に人気があるのは巡回野外映画会とドサまわりのモダン舞踏団の興業で、寺の境内が使われたり、学校の校庭で行なわれたりする。こういう映画会などは夜明けまで続き、ボリュームをいっぱいにした、巨大なスピーカーの轟音が村を圧する。

教育

ドンデーン村の寺の中に学校が創設されたのは 1924 年であり、独自の小学校は 1941 年に現在地に建てられた。現在は 6 年制である。ドンデーンとドンノイの子供たち合計 人 が通学している。

10 年ほど前までは、たいていの子供は小学課程のうち 3-4 年も就学すればいいほうであったが、最近は急速に変化しつつある。おおかたはそれでも小学校 6 年を卒業させてもらうのがせいぜいであるが、少数ながら中学校（高等小学校に相当するものがドンハン村小学校に併設されており、もっと大きい中学校はターブラとコースムピサイにある）に通う少年少女の数が増えつつある。師範学校、看護学校、秘書養成学校に通うものすらでてきつつある。とくにここ 2-3 年の変化が激しい。

情報

1970 年代、とくにその後半から、ドンデーンのすべてが急速に変わり始めたように見受

けられる。もっとも大きい変化は情報量の変化ではなかろうか。村人が以前は情報から全く閉ざされていたという意味ではない。男性は、ハーナーディーのみならず、かなり長期の出稼ぎの機会も多く外界の情報にはかなり通じていたともいえるが、女性は、通婚圏がごく限られていたこともあり、外界に対するアンテナの感度は低かったとおもわざるをえない。それが、まずラジオが普及し、電気が通じてからはテレビがまたたくまに入ってきた。1983年現在、村には 33 台のテレビがあり、内 6台はカラーテレビである。夜昼となく、もっともポピュラーな娯楽はテレビ番組である。若者たちの服装などは都会とそう違わない。テレビは情報とともに、新しい生活様式をも一挙に村に運び込んだようである。道路整備に伴って男女ともコンケン、タープラへの通勤就業の機会が増え、また野菜などを市場へ運び、売るという新しい経験をした。1983年にはタープラにも郵便局が開設され、バンコクやその他の遠い都市へ出ていった息子や娘たちとの通信も便利になった。中近東への長期出稼ぎはもはやそう突拍子もない行動とは思われていない。出稼ぎの機会を探るアンテナはすでに外国へも向けられている。子弟の教育熱の急速な高まりもこういう外界との接触により触発されたにちがいない。